

## A短期大学看護学科における卒業研究の動向

—がん看護に視点をのいた分析から—

掛屋 純子\*・木下 香織・山縣 由子・古城 幸子

看護学科

(2008年11月12日受理)

本研究の目的は、カリキュラム改正以後の過去9年間の学生の卒業研究から、「がん」をテーマとして取り上げる学生の研究動向を明らかにすることである。1999年から2007年にA短期大学看護学科学生が卒業研究として取り組んだ561件のうち、「がん」に関する研究論文31件を分析対象とした。研究テーマを類似性で分類し、研究テーマと研究方法を経年変化で整理し動向を分析した。研究テーマは、内容の検討を行うことにより13のグループに分類ができた。それらの概要および内容を研究者間で吟味することによって、研究の動機は、「自己の経験からの研究」の視点と「興味や関心からの研究」の視点の2つに大別された。

(キーワード) 看護研究、がん、研究テーマ

### はじめに

看護基礎教育としての看護研究は、研究的手法、理論的思考過程を学ぶことを目的としている。A短期大学看護学科では、看護研究が昭和55年の開学当初より27年間継続されており、学生一人ひとりが興味・関心のあるテーマを選定し、1人1編の論文を作成し、集録集を発刊している。学生時代に研究を経験したことは、卒後5年経過しても「よかった」と答えたものが8割を超えており<sup>1)</sup>、臨床現場に出てからも継続した看護研究へ発展することが期待できる。

厚生労働省の調査においてがんによる死亡者数は、平成17年で32万5941人、全死因の30.1%を占めており<sup>2)</sup>、現在でも日本人の2人に1人ががんに罹り、3人に1人ががんで死亡している。10年後には、3人に2人ががんに罹り、2人に1人ががんで死亡するといわれている<sup>3)</sup>。このように臨床ではがん患者との係わりや援助、がん看護に対する研究が求められる時代になってきた。

そこで今回、カリキュラム改正以後の過去9年間の学生の卒業研究から、「がん」をテーマとして取り上げる学生の研究動向を明らかにすることを目的に調査したのでここに報告する。

### I. 研究目的

カリキュラム改正以後の過去9年間の学生の卒業研究から、「がん」をテーマとして取り上げる学生の研究動向を

明らかにする。

### II. 研究方法

#### 1. 研究対象

1999年から2007年にA短期大学看護学科学生が卒業研究として取り組んだ561件のうち、「がん」に関する研究論文31件を分析対象とした。

#### 2. 分析方法

研究テーマを類似性で分類し、研究テーマと研究方法を経年変化で整理し研究者間で検討を重ね、研究の動向を分析した。

#### 3. 倫理的配慮

「看護研究集録集」として公表された論文を対象とし、個人が特定される研究論文の著者名は分析対象から削除した。研究対象の年度の卒業生に、研究の趣旨や個人情報保護の方法について書面にて説明し、同意が得られない場合はE-mailでの連絡を受け付けた。

### III. 結果

研究テーマは、内容の検討を行うことにより13のグループに分類ができた。それらの概要および内容を研究者間で吟味することによって、研究の動機は、「自己の経験からの研究」の視点と「興味や関心からの研究」の視点の2つに大別された(表1)。「自己の経験からの研究」の視点での研究の総数は、20件であるのに対し、「興味や

\*連絡先: 掛屋純子 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

関心からの研究」の視点での研究は、11件で「自己の経験からの研究」の方が多かった。

大別された「自己の経験からの研究」では、実習や自己の家族との死別体験、がん患者の家族としての自己のふり返りを中心とした内容であった。

また、「興味や関心からの研究」は、看護学生を対象とした告知に関する調査、ホスピスに関する文献検討、死生観に関する看護師へのアンケート調査などであった。研究方法は、31件中、面接調査が13件と最も多く、次いで事例検討10件、アンケート調査4件、文献検討3件、アンケート・面接調査の併用調査の1件であった。

がん看護に関する研究の年次推移は、2000年に5件、2001年が6件と多く、2003年には最も少なく1件であった。それ以外は年間3、4件の推移であった（表2）。

事例検討は、2003年、2004年、2007年を除いては、毎年研究テーマとして取り上げられていた。その年間推移は1～2本であった。

1999年から2007年まで、すなわち看護研究収録集18巻から26巻までの詳細な研究テーマ、調査方法の内容を示

した（表3）。全体的なテーマの選定は多岐にわたっており、「患者の痛みを理解すること」や「ストーマ増設患者をとおして学んだこと」、「患者との関わりを振り返る」などであった。

#### IV. 考察

##### 1. 自己の経験からの研究と興味・関心からの研究

研究の動機は、内容の検討を行うことにより、「自己の経験からの研究」の視点と「興味や関心からの研究」の視点の2つに大別された。

川島は、臨床看護研究とは、毎日の看護実践の中で起きる小さな疑問や気づきを大切にすることから始まる<sup>5)</sup>と述べている。調査方法について概観すると、成人看護学実習や基礎看護実習を振り返る事例検討が10件と多かった。すなわち学生は、臨地実習という看護実践の体験から、患者とのかかわりや、対象理解についての小さな気づき、また、そこから派生する疑問から自己の看護のあり方・考え方について問題提議し、看護研究へ着手する

表1 研究テーマ別に見た経年変化

テーマの分類 / 年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計(%)
<b>自己の経験からの研究</b>										
がん告知された対象への看護		1	2							3(9.7)
疼痛コントロールに関する看護		1								1(3.2)
ボディイメージの変化への看護		1	2							3(9.7)
家族の心理的変化と看護介入			1	1		1	1	1	2	7(22.6)
ターミナル期の看護	1	2		1			1			5(16.1)
グリーフワーク				1						1(3.2)
<b>興味・関心からの研究</b>										
小児がん患児の母親の心理過程							1	1		2(6.5)
配偶者支援				1						1(3.2)
ホスピスに関する文献調査			1			1				2(6.5)
告知に関する学生への意識調査					1	1		1		3(9.7)
患者会参加の効果に関する調査						1				1(3.2)
死生観に関する看護師へのアンケート調査									1	1(3.2)
男性への乳がん認知に関する調査									1	1(3.2)

図2 研究テーマ別に見た経年変化

調査方法 / 年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計(%)
面接		3	3	2		1	1	1	2	13(41.9)
事例検討	1	2	2	2			2	1		10(32.3)
文献検討			1			1		1		3(9.7)
アンケート調査					1	1			2	4(12.9)
アンケート・面接						1				1(3.2)
年次推移	1	5	6	4	1	4	3	3	4	31

表3 看護研究集録集18巻から26巻までのテーマ、調査方法

巻	番号	テーマ	キーワード	研究方法	研究対象
18	37	ターミナル期にある患者・家族への援助		事例検討	患者・家族
19	3	癌告知を受けた人の看護を考える		不明	患者・家族
19	22	そばにいること －ターミナル期の患者の看護を通して－		事例検討	患者
19	23	患者の痛みを理解すること －痛みのコントロールがうまくいかなかった患者から学んだこと－		事例検討	患者
19	27	乳房切除患者とその夫の心理的変化に関する研究		面接調査	患者・配偶者
19	43	終末期医療としての在宅ホスピスのあり方		面接調査	患者・家族
20	4	わが国のホスピスをつつた長谷川保の生涯		文献検討	
20	23	成人看護 癌で両親を亡くした家族の心理とその看護介入 －家族へのインタビューを通して－		面接調査	家族
20	24	告知を受けた患者が望んでいる看護について －告知を受けた患者のインタビューより－		面接調査	患者
20	25	ストーマ造設患者を通して学んだこと		事例検討	患者
20	29	乳癌患者の心理的変化 －外来通院のインタビュー調査から－		面接調査	患者
20	30	患者との関わりを振り返る －胃癌の告知を受けているKさんとの関わりを通して－		事例検討	患者
21	10	一つのグループワークから得たもの －私の看護への示唆－		事例検討	
21	19	患者の側にいること －成人看護学実習の受け持ち事例をプロセスノードを基に振り返る－		事例検討	患者
21	23	終末期患者の家族へのアプローチ －夫を癌で亡くした家族へのインタビューを通して－		面接調査	家族
21	26	癌告知をめぐる家族の心理 －家族へのインタビューと文献から考える－		面接調査	家族
22	18	がん告知における立場による考えの違いについて －N短期大学生の考える告知と医療従事者の告知を比較して－		アンケート	学生
23	19	乳がん患者会の効果について －A会岡山支部へのアンケートとインタビューを通して－		アンケート・面接調査	患者会会員
23	50	終末期の看護について 末期癌患者の病名告知と余命告知に関する意識調査		アンケート	学生
23	53	がん患者の家族への援助 －告知から終末期を通して妻が感じていたことより－		面接調査	家族
23	57	終末期におけるスピリチュアルケア －ホスピスとビハークからの一考察－		文献検討	
24	54	小児癌の患児を持つ母親の心理的変化に関する研究 －母親の手記の分析を通して－	小児癌患児、母親の心理的変化、手記、看取り	文献による事例検討	母親
24	61	終末期看護について 患者・家族が望む終末期看護とは －祖母の事例を通して－	がん患者、終末期看護、家族、QOL	事例検討	患者・家族
24	62	癌患者の闘病生活を通しての家族の想い －家族へのインタビューから－	癌患者、家族、闘病生活、自己決定	面接調査	家族
25	14	小児がんの児をもつ母親の心理状態について	小児がん患児、母親の心理変化、手記	文献による事例検討	
25	60	終末期看護について 終末期における家族の葛藤と看護 －病名について知っていた家族と知らなかった家族へのインタビューを通して－	葛藤、不安、告知、家族、ケア	面接調査	家族
25	61	終末期患者の希望を支える看護を目指して －成人看護学実習の一事例から－	終末期、癌、精神的ニーズ、コミュニケーション	事例検討	患者
26	16	緩和ケア病棟に勤務する看護師の死生観に関する意識調査	死生観、緩和ケア病棟	アンケート	看護師
26	50	よりよい乳がん啓発運動をめざして －アンケートをもとに人々へ伝えたい情報－	乳がん、啓発運動、アンケート	アンケート	男性
26	58	終末期患者と家族を支える看護とは －基礎看護学実習Ⅱで受け持った事例より－	終末期、癌、家族、精神的ニーズ	面接調査	家族・訪問看護師
26	57	終末期看護に関するもの 望ましい終末期患者の家族支援	終末期患者、家族支援	面接調査	家族

動機付けになっていることが考えられる。そのため、「自己の経験からの研究」の視点の研究件数は、「興味や関心からの研究」の視点の研究と比較して多かったとも考えられる。

一方、「興味や関心からの研究」の視点での研究については、1981年のリスボン宣言「患者の権利に関する世界医師会リスボン宣言」<sup>6)</sup>を受け、「告知」や「インフォームド・コンセント」などについては、講義だけでなくマスメディアでもよく取り上げられるようになった社会的背景が影響しているのではないかと考えられる。そのため、学生が興味や関心を示し研究着手への動機付けになったのではないかと推測される。また、「ホスピス」については、我が国において1991年5月、全国のホスピス・緩和ケア病棟が集まり、ホスピス緩和ケアの質の向上及び啓発、普及を目的に「全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会」が設立され、本格的な実践の時代に入った<sup>7)</sup>ことが「ホスピス」について興味・関心を高めた可能性がある。

## 2. 研究件数の動向と要旨の内容

2003年に「がん」をテーマにした研究件数が減少したのは、学生が関心を持っている研究テーマを提出する期限を3年次の臨地実習開始前に早めたことが関連していると考えられる。すなわち、臨地実習での看護実践の中で起きる小さな疑問や気づきを体験する機会が少なくなったことが影響していると推測される。

また、看護者の倫理要綱<sup>8)</sup>が2003年に提示されたことや、2005年には個人情報保護法の施行<sup>9)</sup>などの社会的な背景の影響が大きいことも考えられる。このような背景をうけ、最近では医療機関において患者への倫理的配慮や個人情報保護の遵守などを掲げ、病院単位での倫理委員会が立ち上げられており、看護研究を行う際には倫理委員会での承認が必要となった。学生であろうと、がん患者のみならず、患者へのアンケートや面接調査を行う際には、倫理委員会でも承認されたうえで研究を進めることが求められている現状がある。そのため限られた時間で研究を進めていかなければならない学生にとっては、困難なものとなっているのではないかと推測される。学生が例えば、がん看護について興味や関心があってもこのような理由により研究に着手できないといった問題が生じているのではないかと考えられた。学生の知りたい、学びたいという気持ちを大切に研究の芽を育てていくためには、このような問題に対して、担当教員が、学内の倫理委員会での承認があれば医療機関での倫理委員会が省略されるよう交渉する、医療機関との調整をするなどの必要性がある。

研究の要旨を概観したところ、大別された「自己の経験からの研究」では、実習や自己の家族との死別体験、がん患者の家族としての自己のふり返りを中心とした内

容であった。また、「興味や関心からの研究」は、看護学生を対象とした告知に関する調査、ホスピスに関する文献検討、死生観に関する看護師へのアンケート調査などであり、両者は共に学生の看護観の高まりに影響していることが予測される。がん看護は、予後不良の患者さんの終末期の心身の苦痛や不安をどのように援助していくか、限りなく個別的であるのと同時に、1人の人間としての看護師の生き方とも関わる問題である<sup>10)</sup>と言われている。このように、自己の看護観を高めるものであり、人生観にも大きく影響を与えるものであるといえる。がん看護とは、患者の心身の苦痛や不安を理解し、よりよい看護について深く考え、1人の人としての人生の最後のステージに関わる事のできる貴重で、他にはないかけがえのないすばらしい体験が出来るという「看護」との出会いを大切に、臨床現場での活躍が期待できるものと考えられる。

今後も多くの学生が「がん看護」について興味や関心をもち、看護研究として自己の看護観を高め、がん看護の発展を望む。

## V. 今後の課題

今回は、カリキュラム改正以後の過去9年間の学生の卒業研究から、「がん」をテーマとして取り上げる学生の研究動向を明らかにしたのみである。学生の「がん」をテーマにした研究の内容1つ1つにふれることはできていない。研究内容からの考察についても分析を行い、今後の動向も含め検討していく必要がある。

## 謝辞

今回、調査にご協力くださいました、研究対象の1999年度から2007年度の卒業生のみなさまに、深謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 岡宏美・栗本一美・木下香織他：看護基礎教育「看護研究」の卒後の研究活動への役立ち.新見公立短期大学紀要,27,117-125,2006.
- 2) 「人口動態統計」：厚生労働省大臣官房統計情報部,2005.
- 3) 中川恵一：ビジュアル版がんの教科書.三省堂,5,2006.
- 4) 小野晴子・杉本幸枝・栗本一美他：平成19年度特色ある大学教育支援プログラムに選定 質の高い看護職養成のための看護研究—主体的課題発見能力を育てる学習支援—新見公立短期大学紀要,28,167-176,2007.
- 5) 川島みどり：いきいき実践たのしく看護研究.東京、看護の科学社,43,1994.

- 6) 日本医師会: 患者の権利に関するWMAリスボン宣言.<http://www.med.or.jp/>
- 7) 日本ホスピス緩和ケア協会: <http://www.hpcj.org/>
- 8) 石井トク・野口恭子編著: 看護の倫理 資料集第2版 看護関連倫理規定／綱領／宣言の解説.丸善株式会社,2007.
- 9) 内閣府: 個人情報の保護 [http://www5.cao.go.jp/seikatsu/kojin/index\\_sub001.html](http://www5.cao.go.jp/seikatsu/kojin/index_sub001.html)
- 10) 川島みどり: いきいき実践たのしく看護研究.東京, 看護の科学社,21.1994.

**Trends in graduation studies in the nursing department of a junior college:  
An analysis focusing on cancer nursing**

Junko KAKEYA, Kaori KINOSHITA, Yoshiko YAMAGATA, Sachiko KOJO  
Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Okayama 718-8585, Japan

**Summary**

The purpose of this study was to clarify trends in students' research on "cancer" from their nursing studies over the past 9 years following the amendment to the curriculum. The target for analysis was 31 papers on "cancer" out of 561 graduation theses written by students in the nursing department of a junior college during the period of 1999 to 2007. For trend analysis, study themes were classified by similarity, and both study themes and methods were arranged in accordance with their annual changes. Based on a review of the contents, study themes were classified into 13 categories. Through discussions among researchers on the abstracts and contents, the target studies were largely divided into two types from the viewpoint of motivations to study: "studies based on the writer's experience" and "studies driven by the writer's interest."

**Key words:** nursing study, cancer, study theme